1

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給
ひける中にいとやむことなききはにはあらぬか
すくれて時めき給ふありけりはしめよりわれは
とおもひあかり給へる御かた〳〵めさましき
ものにをとしめそねみ給ふおなしほとそれより
けらうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの
宮つかへにつけても人の心をうこかしうら
みをおふつもりにやありけんいとあつしくなり
ゆきものこゝろほそけにさとかちなるをいよ〳〵あかす
あはれなるものにおほして人のそしりをもえ
はゝかりせ給はす世のためしにもなりぬへき御

もてなしあはかんたちめかう人へ人なともはひなく
めとうはめほいかこまはゆま人みなおほえなかれ、
もはらうりもかはすのおこわりう世も
みかきあしうわけほとやうくはあのしあかも
あはれなう八人見もてあ庵こくさかなわて楊貴妃の
たあしもひおいそてはへすあわゆくりいとりした
なおよすおかられとかうしけなおは心りへたくひ
あきをとあみこみそてまうひ給ひちて此大納言いなく
なわてよくふのうさなんいよし人のよしあは
よそおやうちくしさしわうまて世のおかえ猶
康のなるはうさしくふもおもうれ何すのきしま

ととともてなし給けほとかはとわたてゝもうくし
歌はうし給みあけほといことおは时いあをよわれ
あくんかうけなおさほれ乃世りもは特めわやふう
うわく每世りなく歌よしなるたま此おのゝみこ
さんへむまれ給ぬいはしりも心ととなりうさ給て
いそきまんうきては證えすふふめつゝかなうちこ
のはうさちなわ一のみさい右大臣の女は此はりる
またよきおもくうさひあ義まうけ乃君と世り
もてりしつまおと歌とゆまとこ此は上かひまはなくひ
給へくもあゝさわけほとてお後うさ此やむしとれまぬ
はお月ひまそこ此きあみなわくさら物よおかれ

うはなるゝかさになくりしめよわたしなへ
てのうへ言はのへし竹へきてはかはあはざりさは
おかしいかゞ座むちとなく上もあうしけるかへまわ
なくまはたはきなはまゐりけさ給へまはあうひの
おほしくなりゝかもゆへあまたと此よしく
入りいまはまうのかゝきなふあ給時よはおかとの
こゑわすくして座りてさみうたをなとはなう他
にれまへさしきりてなき物竹し程よゝその法うく
うなおうきりもみえし後ゞ此みこむまれなて
のちいかゞ心ちとおもかり是まてたまは世かも
ちうさはいちのみと此丹竹へきかめわかやう一の

みこの世はいおかしうしうつへ天人よりわさ起り
まいりなてやむしとおもはは思ひなくてなうはみこ
たちなとももりしまきいゞ竹はうさ此はいさめ後乃
みそゞな後わつりりしく心くるしう思ひ時きえはき
なくはうしこまはうけなくためのみ斗とえなうられ
としめきはとをとめなゞひとはおかくぎうちはかよ
りくゞのたられきはわはまゝてなりくなるりの
思はなそ志なふはは程はいきわはかなわゞはまうの
はうさしくをすきさをなはゝひまな義はまへを
たわかゝ人此はちゝなをつくし竹もゝまおとりわ
やゝみえさわゞまうのはまはなかもはまはうちさやき給

ねやまくいらせりしゆへて座ありしこれへきちり
あやしきわきをしはしめそくまむかへの人のきね
のすゝかへりたり候さなまいらすともあわみあは時
はえさらぬめさのとをさしうあこなすらかなん哉
わいきそりしたなめわれはらすを給ともおもやうわ
あとより出てかまをさしはくはしきいらすのくまさ
まはいきにふきおりひきひたるをいとくあるれし
御覧してはや源殿よりもとよわさうひ給ふ東寺れ
さうし哉ほうふうはさせ給てかへつかひたよ
いはうれうらみましてを座らむかるなし上これへこ
こゝはみなわ給としはやう候されいらす一の宮のたて

まゐりしたり哉とらはくらはのさおさめとのく
りのをはくしていらしう或はき給ふられたりつけ
ても世のそしりのくわれはられとこれへこの哉よは
けりておりも候はかくちんりへあわうさくめはら
しやきますてみえ給なえうまことあへ給ても猶の心しわ
給人たかし給人も世よいておりはりのあわきわと
あさましきまでめをおもひ給りし給ふらしとし乃夜
こやたと西たられ殊んちよわはらひて退りてあむと
し給をいはしまゐらせたりゆるさを給いはとしし給
つゝのあつしさになわ給へまいらめなまでなは哉
しりしあ給みちとの小宮にするに日こ小哉もま

さてのちみな六日此御とだりいとよりかなまはまく
君なく〳〵殊さうしてかうへさせそまほ里給ふ
うしろおもふもあはれましきたちもあかとんはかひ
してみこ殿とゝめたてかつわてきのひそ出給ふ
うきまはほとハさうともえやゝめさをさつほとはらん
したりとくろぬおかほかなさといふかうこなく
おかさはいとふかひ屋のにほひつくしきなる人の
いふかおもやきそいとあはれと御殿おもひしみ
なりうちとふいてゝも来えあはすあはのなきよ
に来といわはてかのしさをほらんすふゆきし
うたひすゑおりめさまとすゝろのうへをなく

く地まわれ此御かほせまとはいろへもえきこえん給
ひとかのえなとゝもいとたゆたうそいとゝなよくと
わきの此けしきそよつたまえいのはまかのかほ
おりめしまとはくさくあまれ此きんしなと此給
ひ給てもみいらを給てんさうたりゆるはき給りし
かなきあらんえちたりもなくれさまみぬしかう
ちきしを給かえとさわともう地さてゝえゆるや
らしとの給えすなを世もいとゝいらしかうえさそ
まつわて
かくさわとてあかはらくたのうあし来りいかの御
ほしきたいのちなわくわいとかく思ふ給へまし

うはといふ義もたえん侍る義こそ侍りしけなることは
あわげなるさとい覚ゆるしけりたゆきなるはかく 君云
なかりしものをもおもひとはかはらんしはてんとお
かしめ侍りけふりしむへ義いかわともさ侍へきさ 母君云
人くうけたまはいまにすひすわと聞こえいかうを
ちまわなくおもかしなかう侍りてさうを御ふつ侍 かりう
むまのくほとふさうわてつ経まどろまれさはりし
うせさを御侍つうひのゆきさうふかともなほにな我
いふを義をかきわなくの御ことをつ侍を夜なかうち
侍くふかとりなんたええて物めふとてなほさは
けれ御侍のひもいとあへなくての人へまいりわぬ

おこしめは侍心のまゝとひなる事もおもりしめしわつの
まはこもわれりし侍まで みこいかくてもいと侍らん
拾侍かりけるとかく侍なとにさふつひ給ういなる義
うなれは侍うて御なんとはなる事の侍らんを
おもかりたくすさ婦人ゝのなおとまとひうへも
侍なかくの心まなくなるまおりしまんをあやし
かうえたそまは侍物人侍をす給しきさとになる
うゝ侍まうれのうなりゝぬえなまわきさめる我侍
しておきれはいふうひなしかう義ては侍まいまゐ此
さほう小おさめたそまつふをよくいのかくおなし
けふわかものほわなんとなきこかま給て侍をくま

の女房のくるまにしたひのりたまひて愛宕といふ
所にいといかめしうそのさほうしたるにおはし
つきたる心ちいかはかりかハありけんむなしき御
からを見る／＼猶おはするものと思ふかいとかひ
なけれハはいになりたまはんを見たてまつりて今ハ
なき人とひたふるにおもひなりなんとさかしう
のたまひつれと車よりもおちぬへうまろひたまへハさ
は思ひつかしと人ゝもてわつらひきこゆうちより
御つかひあり三位のくらゐおくりたまふよし勅使きて
その宣命よむなんかなしきことなりける女御と
たにいはせすなりぬるかあかすくちおしう思さ

るれハいまひときさみのくらゐをたにとおくら
せたまふなりけりこれにつけてもにくみたまふ人ゝおほ
かりもの思ひしりたまふハさまかたちなとのめてたか
りし事心はせのなたらかにめやすくにくみ
かたかりし事なといまそおほしいつるさまあし
き御もてなしゆへこそすけなうそねみたまひしか人
からのあはれになさけありし御心をうへの女房
なとも恋しのひあへりなくてそとはかゝるおりにや
とみえたりはかなく日ころすきてのちのわさなとに
もこまかにとふらはせたまふほとふるまゝにせんかた
なうかなしうおほさるゝに御かた／＼の御とのゐ

なにともたえてしのびぬる波にひちてはりしくる
世の人はえそきつる人さへ露のけき秋なりけるさ
はとまて人のむすめおくまりける人の涙おちて
うれとう弘徽殿なとにはおゆるしなりのほのけ
一の宮を見たてまつらせ給ふにもまうこや乃御心
しさ乃におもほしいそはべしまつさ女房御
めのとなにとはかりしつゝかなきさしめの聲お
なちてまはかふりしさむきの夢乃ほとつゝすわ
もおりしいはつかすおもなくてゆふひの空ふとりかを
はかりのゆくはく秋比おりしきなとよいふしたて
さを袖て涙そなかめおりしまひかやうのおもわれ

はかうひなくきさを袖しふんをおる物のねを
うきなうしきてこえ出ることを袋も人よりおわれあと
あわしけりひりしとのおも影にはとうひておか
さふゝふもやこ乃うはゝにはなを城とわりわ御心
うしこゝは涙うてはきそうやもひさいふくよわけりひ
わりまさなわやもめすゝなきと人ひとわの神のしつ
きにとかくはくろひたてしめ涙すきなとりてす
うしはかるをやくふくれて一しおの人ふなとに草も
たかくなわ聲おふいやくあまたるおくちゝして月
うけなうわそやへむくゝふもさりしすさうし入さる
又あくれゆてふおわろしてまくきさことかとこえりのこえ

おはしまさてとまわ給ふかいとうおそをかく侍れは
うひのよもきふ乃露わけへおりつけてもよろ
うしうなんとてけはえさふましくかいはまいわて
はいとゝ心くるしうんきもはくはやうみなんと
内侍のすけ乃かうし所しを招おもひ所へきて然
んちうりもけふうゐとゝきのひゝくう侍けれとて
屋てたあらひて御用揃とつたゝ経とゆきりしい
ゆめうと乃見たとこましをやうくおりひきの
ますふりもさむへきうこなくさくうこきりはい
うふすへきわさりうともとひおいすへきんなま
経義をとおひていはいわおなんやまみこやのいと

おもはゝうるく露けまなりりすくておもんなは
まうおかさは所くをとくはいわ所へなとけりくま
うも乃たまえをやらすむせうへゝをおはほうとはい
人も心よはくえたゝてはつ所うんとおりしはゝまぬ
みしもおゝぬ所らしきの心ゝ所しさりうけさは
りわもまそてぬ屋うすてなんはうそ給めるとそ所え
たそまつふめもみえはしぬようくうしゝ経おかさ
あとをひうわまそてなんとて見おお（法文の文）とへいすゝしう
ちうまたゝすもやとはちすくい月日にうへていと
さおひかゝいゝまわなをりさりなんいおけなそ
人もいつふと思ひやわはゝもふとももよえくてはぬ

わかはかなきをいまいな哉むしのかこえによなは
らへて物し給へなとこまやかにのたうはせ給へるま
ゝやきの露小萩むすふ風のをとりに小萩か
もと哉思ひあらやまとゝあまとえ見給ふそすいのち
なかさのいとつらう相り小竹へまうて小松の木
もりんおもとふまゝつのしう思給へ侍まてもとしき
にゆきうひ侍らんこといましていとはつかしわか
くなんかしこふおほせことをたひたひうけたまは
りなからみつからはえなん思ひ給へたつまし
きまた宮はいのちなかくもほしめてふるのまいわ給りん
事をのこなんおはしいつくめまいことりわか

うあしうえてまつわ侍ふなとうちしくよ思給
へるさ故をうしろへゆくしき方に侍まいかく
てわりしまんもいとくしうかうしけふなくなと
の給宮いおかとのこゝわりかわえそてまはかて
くりしく侍かはまも我うし侍ら故かしきをまち
おりし故とうんを取ふけ侍ぬ夜しとそていうく
くま故かふんの夜こもさんかさたうくりしをたま
うゐくわうわかきうえ故かりう侍哉りくし心も
心のとうかまうてたまへとしろうまししくおも
たゝしきはいそてなちのわ給しねとかゝ故
はきうこみてえたてまはる夜こはきなまいのち

おもはかれむまれし時よりわかれにふんあかし人
まて大納言となるまてしたしき人の言はかへ
のかいかなしすとけさせたてまはまなくなりぬ
とそくちおしう思ひくはれはなきと遊てゆきめくり
まはしよりおちつくしうらうろこ思ふ人もなき
ましらひ中くなるへき事とおもふなりける
たゝうみゆいこむとたのんしとなるはいふし
年て侍しを君よあはまふまてのはんさしのころのに
かうし巻なるよ人けなきたるをかくし侍りまし
らひ給ひぬはを人のうえをふかくはもかやきをうる然
事おほくなりかうひな侍によこさぬなる座ひめて

はぬるりうくなりはぬまていかへまていつくなん
かしこきはんさしを思ふ所へ侍ふこれもかへななさ
んの御やくにあとひもやられむさかへまておもとに
親もふけぬうへもしのなんまつ御心なりしはな
かちに人めおもろくたゝわおほされしもなかは
ましき職のわとゆまいはらわか成人民はかよ
なん世にいたらせ人の心をぬけたる事はあらん
しとおりふ哉たゝの人のゆへめてあまりさは
ますやき人民うみ哉をひしてそくいかうまち
すそゝまて心おさめむうゝなきにいとゝ人わろう
うくなりなかわたろ成もさまの世中しうなんと

うち誦しつゝ御志かたきうちちりのくだりし
まれとうきまてはおきれあらく秋いさゝかふけぬ
またこよひすくはせはかへりまうきをんなかりつき
嵯峨の御月に入かゝるの空さへうすくわたるまるよりを
いとせくしく明て草むらの虫のあはれくもよかし
めかなるもいとたちそなまめかくさ草乃かとあわ
せうむしのちる花りきわをはらくてもなつき
秋あかきふるなかるうなえもの人わ御らす
いとしくむしのねきけさわきちふり露
まよなうふ雲乃うん人かちとも聞えはへくなん
といり勝るふ松りし世はをくわりのなとあはれへき

おのかもあるまいたゝうれはりさ見えよとてかゝる
ようりや空のうしろへまかる待さうらくひとくて
まはくしあけのてうとめく物うへおふわかのきんて
うれしき事いさゝかもいはま肉わすわと給夕ゆ
あるひていとさうくしくうへの御あわさ給など
思ひいてきこゆるいとくまいりわおりん事をさうし
のりし代々こゆまどかくいはくしまよ身のうひそて
まほうんもいと人ぎうかふ御しみえたて候はら
てあつりしもあるむはいとうしろめたう思ひきこえ
おてせりくともえまいるをすてまつわゝ侍りぬ
なわかくわ余ぬいまでおかとのごもしをたまいさわ

くらゐをおりさせ給ひてまはるおほきおまへのつかさん
さいはいとおもし語義さうわぬるをよんだる
やうにて是ひやうぶ心ゆくきうきうの世の四ゐ
人さふらひをなて此物語せさせ給ひ職にわたりのよろ
おぼくれ御らんずる其松前の御為亭子院の
かしせ給ひて伊勢つくりゆきさによまをさめまいるやまと
ことの葉をともろこしの奇名をもまさりすぢをう
はくろうじとよせさを給ひてこま座のよあわさ院を
とちを行ふ所のまつあはれける書のひやうの注う
きよ海の清らんしまはいともしこ義い名き所も
侍しはからふ相かせおとりつけてもう義くさす

みだれんちりなん
あらき風ふきぎりけのかれしよわこの義う
うへたる是ほんなるなど座うに見えわがはしきを
心おさめさわくたかやく御らんしゆるすへし
いとかうしもみえしとおりし是門むまどさうよえ
きみひあへさきを給り此詩しりしめ年月
の事さへう義あつめちらのなりおがし清げ
らまそ時の院をお浮清の為うかしをうくても日
白いへりくわかうあき院しうおほしめさ給
故大納言乃ゆいごん母おやまらす宮清の人のないふ
うくりのしすわしす給こひはうひあ給座ふ

とこそおもひわたりつれいふかひなしやとうちのたまはせ
たまひていとあはれにおほしやるかくてもおの
づからわかみやなとおひいでたまはゞさるべきつい
でもありなんいのちながくとこそおもひねんぜめ
なとの給はすかのおくりものごらんぜさすなき人
のすみかたづねいでたりけんしるしのかんざし
ならましかばとおもほすもいとかひなし
たづねゆくまぼろしもがなつてにてもたまのありか
をそことしるべくゑにかける楊貴妃のかたちは
いみじきゑしといへどもふでかぎりありければ
いとにほひなし太液の芙蓉未央の柳もげに

かよひたりしかたちをからめいたるよそひは
うるはしうこそありけめなつかしうらうたげなりしを
おぼしいづるにはなとりのいろにもねにもよそふべき
かたぞなきあさゆふのことぐさにつばさをならべえだを
かはさむとちぎらせ給ひしにかなはざりけるいの
ちのほどぞつきせずうらめしき風のおとむしの
ねにつけて物のみかなしうおぼさるゝに弘徽殿
にはひさしくうへの御つぼねにもまうのぼ
り給はず月のおもしろきに夜ふくるまであそびをぞし給ふ
なるいとすさまじうものしときこしめす
このごろの御けしきをみたてまつるうへ人女房なとは

なからいはしてきてかはいらしきしなちかもく
しまれもみしたまふにうちすてあとふるもあらす
わかれしけちてもそなしはつるへし月もいはぬ
雲のうへもなかなかりくらく秋の月にてもまた
読んあさちふみやとおもひやまはてともし火を
かくきはくしておきおりしまん右近乃はつさの
とのみやこ乃おほえ世ゆるはらしみなわぬるある
御人めをおほしてよろつ乃おとにいて世はて
もまと読まをは事かしあしたまれたさをはふ
とそもあくるもまつてとおかしいはふかもおかさ
まつわこといはなこふるを給ぬへかめわもみなとも

きこしめすほとあさかれぬのくしなけかはしきさを
はて大将の君もものなとはいはれすなみあはれし
めしたまはんいきんりさふらふぬかきまはんなる
しきけしきみえたてまつるまかけくすへてちかう
さふらふ義はいおとこ女いとをかなれはさうな
といひあたをはくなけくさるへきおほえわさういお
りしましくめてくらみ人のそしてまうえなもはし
うらを得りはらみ浅きとふきるるとなれたり
またもうしなるをたまひいとありしかく世のなか所
ことはもおかしすてたる御うになりゆくはいはし
ぬいくしきわきなわと人みこのしのためしまて

ひまいてゝけくめきなけさりし月日へてまうき
はいはぬいとこゝの世の物なるすがよしにおほよ
そ老所へまはいやくゆくしうおりしにおほく流
とし乃はる坊さたまはぬやもいとひまこさ彼りし
うあかきと御うし給こずへき人もなくまる世の
うけひくましき事なれは中くあやうくおりしなく
うわてきふかもいとさせぬたになわめるをさむるわ
おかしたまとうなるあるあわけれ世の人も
ぎこえ女侍も侍あつ給おちぬ給ぬの身侍れたかの
うこなくさむうたなくおもりしその心てたれいまさらむ
ありたまさろつねゆうんとまうひ給しもるし

まや侍ぬまう哉所ぬまいみこまとかなしひあかす
すり我か主みこむ侍かなわ給としなまいこみ
ふひいれおりしきわて悲なお給ふとし給なまむ侍
ひきこえ給へるをこふそまほまさくりなしひを
なん西こ乃給ひくく成りまたうちふ乃えはふくひ所
なく侍よなわかへたふくりしめなと世侍き給ひて
世よきこすさきうりしこくれいすまいあまわり
おもろこさまて侍給えすとい主もくえかくこ
たまりしすて来なくてならうふうし給へとて
弘徽殿なとかもわこしを給ふ侍ともありた座りて
なんす乃うちにいまたてまつる主給いこしきものふ

あたかたきなりともみてはうちゑまれぬへきさまの
し給へれはえさしはなちたまはす女みこたち
ふたところこの御はらにおはしませとなすらひ給へき
たにそなかりける御かた／＼もかくれたまはすいま
よりなまめかしうはつかしけにおはすれはいとを
かしううちとけぬあそひくさにたれもたれも思ひ
きこえ給へりわさとの御かくもんはさるものにて
ことふえのねにも雲井をひゝかしすへていひつゝけは
ことことしくうたてそなりぬへき人の御
さまなりけるそのころこまうとのまいれるな
かにかしこきさうにんありけるをきこしめして

宮のうちにめさむことはうたのみかとの御いま
しめあれはいみしうしのひてこのみこを鴻臚館
につかはしたり御うしろみたちてつかうまつる
右大辨の子のやうにおもはせてゐてたてまつる相
人おとろきてあまたゝひかたふきあやしふくに
のおやとなりて帝王のかみなきくらゐにのほる
へきさうおはします人のそなたにてみれはみたれ
うれふる事やあらんおほやけのかためとなりて
天下をたすくるかたにてみれは又その相たかふへし
といふ弁もいとさえかしこきはかせにていひかはし
たる事ともなんいとけふありけるふみなと

はくわかりしてくふあすかへまさわなんとゆるに
かくあわのなほ人たりたいめんしたるに頼こひ
の人へまてうなしうはへきんちんをおもしろくは
くわたるりえこもいと何事あるくをはくまち
へ原なかさわなうめてそてまつわていこしきを
くわも此ともをはくけたてまつ原おかやけよわも
おかくりのたまひまとをのはうことひろうわてを
らさを頼てまと意寄のもほちおとくなとゆうなる
事ふのとおりしうゝひてなんわわくるみなと
しこふ法心ありやまとさうをおかきそおかし
よわよ筆原をちあはいまて此きえみをみこふも

あはれを頼そさわく原を桐人は故ことゆうしこうわ
くわとかわりて世界歌ものかたりのよきあまふそい
たゝなはさうしまう法世をいとひさうめなほをたく人
おそれおほやけのはうしろみをしるなんりさふらふも
さはりしけれるこやくかたりさるめていふくみち
くは此さんとあつらいさせ頼ふさいことにりしらく
てたく人よはいとあたらしけまとみことなわた
まひなは世のうちひおもひぬへくよりのし竹くい
すくえうたりしこふちみの人りうんか人はき頼
かもかなしき岐ふやときは源氏ありあらしそ
まはるへくおかしときそたか年月ようへて

ゝやまとの御ときとなむおほかりしますなくなりかなしな
くさむやとさ御へ参人ゝとまめゝを炒へとれすゝ
ひよおほかりさみゝたりいとゝうき世のなとう也
ましうのゝもろのかれかりしなわめるり先帝の
四の宮の御かうちすくまゐへふささこえたかくれ
りしまんもゝきさきよになくりし侍めさこえ竹の
なうへよさみゝ閑院の左大臣先帝此時の人
まての此宮かもさゝしう侍りかくまたわけ侍るに
いまけなくかりしまし時よわたえきまは里けれ
もなれえたてまつりてゝ物語めしゝやすかの侍か
なちめゝ語へる人をと三代のみやづかへよつたりわ

めるにえみたてまつりつけぬよきさいの家此ひめ
宮ゝうつくしうおほしてあいしてさうをかへりけるを
おはしさき侍かゝらむとなんと給ひしか御は
後ゝとすり尾と御あさ給ふかまわて見んしわか
きさえんさうを給はりわたくきさき此はなかうゝや
五宮の女御此いとさうなくてまかりし此更衣
のあるかなかるゝれくもてなされしかあしものゆへ
しうとにあかりけゝみえすかくしうしさおかり
ぬゝさうわきるかとかり参さむもうきを給ねんかうお
さ後ゆてかりしまいにかしたゝわかの女御こたちかゝる
おなしつゝよ世の参こえんいとゝうんゝ後に参こえ

うせたまふさふらふ人々はうしろなたち御さう
との兵部のみことかくんかうくておはしまさき
ましよわいうちはにせさせてはんもなくさむ
へくれなりなわてまんうをたてまつりわたりへまふち
はかなとまきらははかうちなわさ夜あやしきまて
すおかへ竹への沙汰いい人みきハまさへわて思ひなし
めてたく人もえれとしめきこえなりのはうけちわ
てありぬうなしのいい人もゆるしきこえさせし
みはんさしおやふくなわしうしおりしまぎれ
とはなけのはつうはんうはろひてこよなく
おほしなくさむやうなるもいのうなきさかなわ

うわ源氏の君はあさわさわなりぬるをましてま
けくわうらをなほさはえりちおへ竹りはいつま
乃はうらもよ人におとらんいたるやい
あはとわくえりいはめてたけましうちれとなひ
たまへつるりいとわのうなはくしけすてもちに
かくれ竹へのはつりわみそはつあなく
ことやをあいのけたまおぼえなぬをいとようなり
竹へ内侍のすきのきこえうふをまつきは人ち
ありいいはのまとおりのきこえなてつゆ小まいる
随はしうな律さひみそてまほとおほえなり
うへものきわな義は思ひともちよてなうとみえたまひ

うちやしくようん春のえはへまいらんちかなんはへなに
めしとおほさそらうたく志ぬへはらつまゐることなと
はいとようなさわしゆへのよひてえぬ給ひもまけ
なうろすなんなとさこえはきたまへまはれさなか心
ちゆもりのなまに花もみちなはきてゝも心さしをえし
たてまつわこよなうんゝよをさこえたまへまいこき
てん乃女はみこの宮ともはなかうはくへきゆへ
うちうへてりとよりのゆくさもたちいて給し
とおかしうわ世よたくひなしとみふてまつわ給
名さうれわまと御宮乃はうこちにもなをに深りし
さはたとうんうることなくうつくしけな徳を世乃ひと

ひたる君とおさなきちはかなくひ給てはおとしも
とわくなきいかくにくひの家とおさなくは君乃は
まうはうさいとうへまうくおなをと十二まては
元服し給ぬるちおかしいとなきてかさわあるに
うりなるとなうへさせ給ふひとくせの春宮の御元
服南殿にてわかしこきさきのようなりかし御
ひきまおとらを給はまにけ藝なとくろはの
さらくさう院あとおかやけあとよはかうまはまに
まゐりかわることもうせとわわさおかさ事あわ
てきようとはくしてはかうまはまつおりし俊
殿のえんのしのひきしひりしむきさりいたてる

くまんさせ法座にはいまの大臣の法座はおよそあり
さなの時ありて源氏はいわかみえつゝゆひかへりな
つゝはなかまゝのみかひさはりへかりん事なし
きなわ大悲にくゝ人はかうまつるふにゆきさするなな
はくしをうくなとんゝるしけなる乍うへいゝやす
示の兄ましうはとおもしいはるよさへうゝ是を心
はよくまんしりへさを於ふうかしかて法
やすく示よはりそかて御うたてまつりへてた
いしゝそてまはわかさはふ心人流れとしか見うと
りゝましてえきはひおへかりにおはしま記はく
おわもあわはるむりしの事とりかへしうれしく

おはさないとうゝきひたなるかといおきなとまや
とうきりいしくおはされはるをあさまし申うつ
ゝけさそひかへまひさいまの大臣のこえうり
たてひとわりしつきかはむせめ香宮よわも法く
きあなをおはしまはら事あわくないこれ恵
よたてまほうん此法んなりくわ肉よも法くしまた
はりゝきかけ進いさうはこれおわの法うしろみな
かめなをうひかし　よもとをよおはき給くれいさ
おかしうわさみつひよまりて行て人ゝおはみ記
なとはいなかをみこたちの法座のすゑあり源氏
つまぬ行へまれとし巻つまぬハ見行事あまとゝもの

はくましさなとまてともかくもあんへまいりひ出きこえ
給ひけれはまんまんよわ内侍富有けた隣りわ給はくへて
わかく成りわ於へきめしわれい成りわ給御わく
ののうへの京極とわてたまふしけむおかうち
さりはうひとくたわまんの事なわはにはま
のはぬてけり
いとわなきさくらのりとゆひもなりこさよ我ちきる
んはむはひこあ川やはあらるへあわてわとはり
はを給ふ
むはひはりんもふり来りとゆひけりこふむる
き御乃色しわきはいと拵うしてなりけりよわ

わりてふさう志於ふひたわ乃はつさの比むまくる
人かうこ給乃たつすへてたまいわたまふみけしれ
けれふみこたちうんうちめつてきてろくとも志ふ
くけりふ成りわたまふそれ日乃はまんへのおわひ
はりのこ物於と右大臣なんうきたまいりわてはつう
まつりをくはとんしきつくのかうひはともなと
とう給を来まて春宮の御元服のわかわりもうし
成されつま中くかきわもなくりつのめしうなんうれ
わとくれはさふけり源氏乃君成うてさをたまふ
さかうきふめはうしきさまてもてりふき我こえ給
つまいと我ひきまてわりしたるをゆへしうまは

をしと思ひきこえんかへり母君ハすこしすくし
ならへるなとよいとわかうなりしまはまけなくは
うしとおほいさわきのおとゝのはおほえいとやむ
ことなかりけりはすゝや内のひとりきさいなりけり
なんおはしけれハまいりはうゐりはきてもまたおなき
座かなにこの君さへかくなりしらひぬまゝハ春宮
のはおほちにそつねり世中をまつわすへき右の
おとゝの御いきほひえ物にもにすさまじなへく
御子ともにつまさりつくにもれし竹の宮の御
りしもくらん此かなまそていとわかうなうしきを右
のおとゝの中そいなもようつまとも見えすくしな

まそのし清きなに四此君なりはをせなへ里なにか
しはまそしつふたるはわゝ後ほしきはおりひ
ともなりなん源氏の君もうへのつよめしまは
まきいあらなやすくさをはもえしなりをんの
うちまはぬちつか此清のわさ後をたゝひなしかる
思ひ義こえてさ座なうん人をこう見あにみひを
なくたおりし代かのになかいとのゝ君いなも御し
代まうしはのまいたる人とは見ゆまかうまなゝにも
清のすおかしなておさなきなとの清ひとへんゝり
うゝ里ていなもくなしこまそすおりし代なおとなま
なわなてのちいおわしやうりみ清此うちにも

いれ給はす御あそひのおり〳〵こと笛のねに
きこえかよひほのかなる御こゑをなくさめにてうち
すみのみこのましうおほえ給ふ五六日さふらひ
給ひておほいとのに二三日なとたえ〳〵にまかて
たまへとたゝいまはおさなき御ほとにつみなく
おほしなしていとなみかしつききこえ給ふ御かた〳〵
の人々世の中におしなへたらぬをえりとゝのへ
すくりてさふらはせ給ふ御心につくへき御
あそひをしおほな〳〵おほしいたつく内には
もとのしけいさを御さうしにてはゝみやす所
の御かた乃人々まかてちらすさふらはせたまふ

さとの殿ハ修理職たくみつかさに宣旨くたりて
になうあらためつくらせ給ふもとの木たち山の
たゝすまひおもしろき所なりけるをいけのこゝろ
ひろくしなしてめてたくつくりのゝしるかゝる
所におもふやうならん人をすへてすまはやと
のみなけかしうおほしわたる　光る君といふ名ハ
こまうとのめてきこえてつけたてまつりけるとそ
いひつたへたるとなん